

第 1810 回（2 月 22 日）

タイ農業の展開と産地移動

井 上 莊太郎

タイは工業化が進み経済発展の著しいアジア諸国の一つであるとともに、豊富な土地資源を背景に、米をはじめキャッサバ、サトウキビといった土地利用型作物の世界有数の輸出国でもある。

報告では、これまで国内や海外の需要に先導されて変化していく傾向が強かったタイ農業の多様化過程を、自然的条件から見た立地適性という視点から考察した。

資料として、近年タイ国農業・協同組合省農業経済局が作成した「作物適性度地図 (Crop Suitability Map)」を利用した。農業経済局による作物適性度地図は、主要作物ごとに作られており、タイ全土を細かく区分し、各区分の用水条件（年間降水量と灌漑の有無）および土壌条件の二つの農業生産条件をそれぞれ 4 段階に区分して点数化し、その合計点を両条件を組み合わせたマトリックス上で評価する仕組みになっている。

タイの国土は、かなり性格の異なる四つの農業地帯：東北、北、中央、南部に区分される。作物適性度地図を利用することで、このように多様な各地の作物生育条件を一度に把握することができる。

ただし、こうした細かく区分された地図は、作物適性度と県別の生産動向を全国的に比較・考察するには不便である。そこで以下の分析では、「非常に適している」に分類される農地の全農地に占める割合によって各県を 5 段階に評価区分した地図を新たに作製し、これらの地図上に県別の生産動向の数値をグラフ化してプロットすることにより、適地性と生産動向との関係について考察した。

主要作物である米（雨期作、乾期作、香り米）、トウモロコシ、キャッサバ、サトウキビ、大豆の生産動向について、その変動が作

物適性度と適合的なものであるか、否かについて検討した。その結果、作物適性度との適合性の高い作物群（サトウキビ、大豆、そして可能性としての香り米）、作物適性度との適合性の低い作物群（トウモロコシ、キャッサバ）、全国的に展開しており両者の中間的性格を持つ作物（雨期作の米）が識別された。

トウモロコシとキャッサバは、今日までタイ農業の多様化の主軸でありながら、現在生産が頭打ちになっている。この 2 作物の場合、相対的に見ると非適地で生産が増加していたことが分析から明らかになったが、このことは国内外の市場需要に対応しながら多様化してきたタイ農業の展開のあり方に対して、適地生産の観点から疑問を提起しているといえよう。

一方、サトウキビや香り米の近年の生産増加は、作物適性度の高い地域で生じており、現在のタイでは自然的な農業生産条件に従って産地形成が行われているとも解釈できる。

今後、タイ、特に畑作地帯において持続的な農業生産が確立されるためには、大規模な土地利用型作物が産地形成する際の核となる製糖工場やスターチ工場等のアグリビジネスを中心とした地域的な資源利用システムの確立が指向される必要があると考えられる。

その際には、民間部門による資源の収奪的な利用を効果的に規制するために、土壌、水といった農業生産条件を考慮に入れた計画的な農業開発が必要となり、そのための情報の提供や生産者への指導・調整といった面で公的部門の役割が高まるとも考えられる。その意味では、タイ政府部内で、作物適性度地図をさらに発展させた GIS 地図を利用した農業計画作成の試みが行われていることが注目される。